談話室

パワーポイント

最近密かな自慢がある。パワーポイントが使えるようになったことだ。講演資料などでよく見かける，色付きの説明資料（A4版）のことである。最初は他人の上書き修正をしていたが，コツがわかると作るのは案外楽しい。論点を箱にして，キーワードを並べる。関係は矢印などで表す。図表を切り貼る。色を塗る。そのうち内容よりも字数合わせやレイアウトや色合いに熱中する。レゴの組み立てのようだ。出来上がると「それらしく見える」から不思議なものだ。今では簡単な説明資料や講演資料は自分で作っている。

ただ，慣れるにつれ，この道具の「危なさ」も見えてきた。見栄えと視覚的訴えで事実や論理のデフォルメができる。現実を単純化し，類型化し，分かりやすい対比軸にする。都合悪いことは省略する。そこに厳格なロジックは要らない，プロセスも捨象できる，根拠の数字検証も不要だ。手のかかる関係者調整や乗り越えるべきハードルは別の箱に入れて，「連携」とか「協調」とか「共有」といったきれいな言葉で，色つき矢印で結んでしまえば「完成」する。要はかなり恣意的にシナリオを作ってしまえる。多分，論文からパワーポイントを作ることはできるが，パワーポイントから論文を書けはしない。イメージの羅列で済むから。だから私でも人前で話す資料ができる。

最近，パワーポイントは世にあふれている。白書のような政策文書でも見かける。いや，政策自体がパワーポイント化，スローガン化の風情がある。単線化された目標～KPIと実現へのPDCA。

今机上に農政の資料がある。説明を聞かずに紙だけ「見る」と，どうもうまく咀嚼できない。基本政策は，「需要フロンティア」「バリューチェーン」「生産現場」「多面的機能」の４つの箱がポンと宙に浮かんでいる。そして10年間で所得倍増だ。私の読解力不足は認めるにして，何を優先し，どう解決と行動の道筋を立てていくのか。地域の農業者，関係者にどんなメッセージが届くのか。

次に農地集積の絵。「対策前」は，複数のお年寄り農家と背の低い若手が分散圃場にぼんやり立っている。「対策後」は背の高くなった若手が集約化された圃場でニコニコ，年寄りは隅っこに引退。「預かった農地でがっちり稼ぐぞ」と若手，奥さんは「六次化に取り組むぞ」，年寄りは「水路や農地はみんなで守ろう」の吹き出し。何だか進学塾の宣伝風である。「やればできる」「私もできました」――どうこの絵を実現するか，現場では関係者が地道に試行錯誤の途上だ。本当

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/

に地域の悩みに向き合っているか…この感じはパワーポイントの持つ図式化の弊害だろう。現実の微妙な色合いは一色に，政策目標は「使用後」に単線化する。

ここで私は，お隣の韓国を思い出す。先日，私は最近の韓国農政の資料を読み，ある驚きを禁じ得なかった。

米韓FTAを前にした議論のトーン。“韓国の発展を阻んでいるのは古い制度と慣行だ。規制開放を”（2006年）。農政改革の議論“これまでの政府の農業保護は構造改革を実現できなかった。需要創出が不十分だ。農業の範囲を食品産業と輸出まで拡張して強い農業を目指す。産業主導で更なる選択と集中を”（08年）…今から８～10年前の話だ。そして程なく，政府主導で農協改革に着手する。経済事業に専念させ，協同組合から株式会社へと（11年）。

一連の発想と流れに既視感を持つのは私だけか。ではこの結果はどうなったか。日本向けパプリカ輸出は喧伝されるが，全体の自給率はどうか，49%に上るソウル圏一極集中の歯止めはかかったか，規模拡大と所得向上は実現したか，世代交代は進んだか，その後の足取りを我々は知る必要がある。

一方で，腰の据わった印象を与えるのがフランスの農政である。フランスでは1960年の基本法以来，一貫して「家族農業経営の近代的発展」を軸に据え，構造改革を実現し農業大国となった。じっくりと農業者育成，就農支援の循環を守る。農地集積・整備，若手就農支援，共同経営法人，３つの制度を軸に地域ごとの農業経営像を明確化し，地域主導で世代交代を促し，構造改革と競争力を手にした。国民は（農家が少数派になっても），「食と農」の質の高さ・多様性に対する，あるいは田園に対する理解と誇りで一連の農政を支持した。一昨年の基本法改正のテーマは「環境の重視，過度な経営集中の排除，世代の更新」だそうだ。

類型的な議論こそ禁物と言いながら恐縮だが，今やこの議論を避けるわけにはいかない。日本農業は今，世代交代期にあり，各地で農地や設備の新たな担い手への引継ぎが多様な形で進行中だ。この局面で地域の多様性を捨象したり，大局感を歪めるパワーポイント的単純化の議論は危険である。研究者はこの手の議論には，事実の分析と論理の点検によって大局感や論点の欠落を補正する義務がある。一方で現場もまた，閉鎖性を捨て間口広く地域の解決にとって必要な取組みに挑戦すべき時だ。研究者は，傍観者的評論ではなく事例や切り口や考え方を示すことで実践的な支援が求められる。いずれにしても研究者の出番だ。

悲しいことに私は今，パワーポイントを見ながらこの原稿を書いている。

（（株）農林中金総合研究所 代表取締役社長　古谷周三・ふるや しゅうぞう**）**

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/